

序 言

立正大学人文科学研究所では、文学部に所属する教員、つまり所員による学際的な共同研究を過去実践してきた。それは、学際的研究が相互関連領域の追求視点を理解し、自己研究領域の欠落部分や弱点を知り、相互の補完および情報交流における素晴らしさを、関係者一同体験しているからであろう。しかし、その反面、くいちがい、理解不足による誤解、まとめ方のむずかしさなど、思わざる困難な部分も多い。

本共同研究「大都市周辺地域の総合的研究」も、立正大学人文科学研究所の年次計画にもとづく学際的研究の一環なのである。そこで、われわれ団員は、共同研究のもつ素晴らしさとむずかしさを、つくづく感じさせられながら4年間を過ごした。この研究が実施されたのは、昭和51年度を第1年次として、昭和52年度、昭和53年度、昭和54年度、昭和55年度、昭和56年度の四ヶ年間に亘っている。大都市周辺の、しかも高崎線沿線の地域研究というので、人文科学研究所所員の中から地域研究に比較的關係の深い、地理学、史学、国文学、社会学、心理学専攻の人びとが選ばれ、調査団を組織することになった。調査団のスタッフは総計7名である。

(1) 研究の目的

日本列島の総べての社会経済現象の発生源、仕掛け人といえる東京大都市地域は、全国規模の情報・資本・産業・人材などを集めながら、各種の影響を首都圏は勿論、日本全土にまた国際社会に向かって波及させている。本研究はこの巨大都市の都市化の影響を強く受ける大都市周辺部を対象に、とくに熊谷キャンパスが所在する高崎線沿線という「セクター状等質地域」を把え、多彩な地域現象を、人文科学による学際研究を通して解明しようとするものである。

(2) 研究対象地域

研究の目的にそうため、高崎線沿線に位置する大型都市、大宮・熊谷・高崎に焦点を合わせ研究を進めたが、問題によっては適時テーマを軌道修正することにした。また、埼玉に位置する熊谷キャンパスの存在意識を考え、研究地域を選定したこともある。しかも、地元社会への文化的奉仕、開かれた大学像への戦略的観点なども考慮に入れた。

(3) 研究計画とその経過

調査研究期間は四ヶ年として計画実行した。

第1年次は、先ず団員全員で合宿し、共同研究の目的、

研究方法、研究計画、研究の進め方など、個々の問題についてのアウトラインや方向を話し合い、一定の合意の上で、研究に入ることにした。初年度に実行したこととしては、①沿線3都市の視察と現地行政機関でのヒアリングおよび意見交換、②市史、地方誌、統計、要覧、文献など資料の収集、③高崎線沿線地域の概観調査、などである。第1年次の報告は、『人文科学研究所年報』第15号（1978年3月31日発行）に、「巨大都市化にともなう高崎線沿線都市の変化」と題して掲載されている。

第2年次は、前田、井上、川越の3団員による高崎市近郊地域の住民の生活構造と意識に関する社会心理学的調査の実施である。その中間報告は、数次の例会で発表してもらい、その都度意見の交換をおこなった。

第3年次は、高島団員による高崎市の歴史的研究と、春日団員による3都市の方言研究の予定であったが、高島団員が海外留学の年に当たったので、研究を中止していただき、その代わりに、前年度の前田・井上・川越3団員による社会心理学的調査の継続と、春日団員の研究を併せ、3年次の研究プログラムとした。

第4年次は、最後の年に当たるが、服部団長による3都市の環境とシンボルの調査研究、山中団員の高崎市の産業近代化の研究の2つのプログラムを実施した。

この4年間は、各年次とも数回の団員集会をもち、各回とも、研究内容につき、報告と討議を行なって、相互交流の実と、意思の疎通を図った。

長いようで短かった4年間の調査研究を経て、ここに未熟ではあるが、曲りなりに、このようなかたちで『大都市周辺地域の総合的研究—高崎線沿線地域を中心として—』の報告書が完成したことは、研究団員の一人としてこの上ない喜びである。

本報告書がまとまったのも、団員各位の絶大なご協力、資料収集・ききとり調査・機会提供など関係諸機関のご好意の賜物と、深く感謝するものである。最後に、暖かい善隣の誼で、側面から応援下さった立正大学人文科学研究所の所長および所員各位に対し心からお礼申し上げます。

昭和56年11月6日

立正大学人文科学研究所

総合研究調査団団長 服部 銈二郎

調査団構成（編成当時の役職）

団長	教授	服部 銈二郎（地理学）	
幹事	助教授 （講師）	前田 征三（社会学）	
団員	教授	高島 正人（史学）	講師（非常勤）川越 次郎（社会学）
	教授	春日 正三（国文学）	（助手）
	教授 （助教授）	井上 隆二（哲学<心理学>）	講師（熊本大学）山中 進（地理学） （助手）